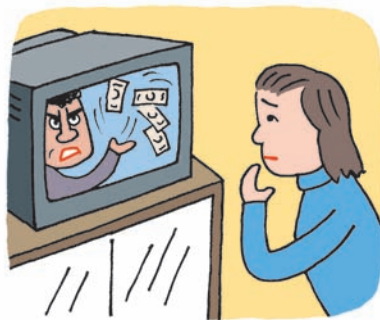


今から三〇年くらい前のことだろうか。いわゆる「悪徳サラ金」が深刻な社会問題になっていた時期がある。法外な金利はもちろんのこと、返済を迫る脅迫まがいの電話、執拗な嫌がらせなどについて新聞やテレビは連日取り上げ、私自身も近所に建つアパートの一室に「金返せ」泥棒野郎」「ブツ殺すぞ」などといった紙が無数に貼り付けられているのを見つけて、ぞっとしたことがあった。

そんなある日、ワイドショーにサラ金の社長がゲスト出演した。見るからに人相の悪い男は当初は余裕のある表情で「私は人助けしているんですよ」などと笑っていたが、やがてキャスターからの辛辣かつ執拗な質問に怒り出し、突如として手元のトランクを開けると、そこにぎっしり詰まっていた一万円札をスタジオ中にばらまき始めた。確か「金のあるものが勝つんだ」「自分の金をどう使おうが俺の勝手だ」というようなことを叫んでいたと思う。

狂ったように札をまく男の姿は、テレビ画面を通して見ても不快極まりもないものであり、何とも寒々しい気持ちになったことを今もはっきりと記憶している。



絵・江口修平

お金のにおい

乃南 アサ

ところで最近は「お金のにおい」のする人がわかるようになってきた。職種に関係なく、そういう類い（なま）の人がいる。彼らは同じにおいをさせている仲間を敏感にかぎ分ける。そして、必ず似たもの同士がグループになって、常に新たな金儲けの相談をしているのだ。彼らは自分たちの「におい」には気づいていない。無欲、裕福だからと言って、そんな連中ばかりであるはずがない。むしろ「お金のにおい」をさせている人たちには、逆に本当のお金持ちの持っている雰囲気は決して身につけられない。

かつてワイドショーで見たサラ金の社長も、「お金のにおい」をさせている人たちも、要するにお金に魂を売り渡した人たちなのだろうと思っている。お金があるらしいと思うのは、それなのだ。お金には、ものすごい魔力がある。人の怨念（おんねん）を吸い込む。その結果として、人間の人生を狂わせ、時として簡単に命さえ奪う。だから、なくてはならないと分かっている。いっつも怖いと思っている。だが、うまくしたもので、そんな風にビクビクしている人間に対しては、お金も最初から魔力を發揮するほどには集まって来ない。

のなみ・あさ●作家。1960年東京生まれ。早稲田大学中退後、広告代理店勤務などを経て、作家活動に入る。『幸福な朝食』（1988年：日本推理サスペンス大賞優秀作）、『凍える牙』（1996年：直木賞）、『地のはてから』（2011年：中央公論文芸賞）をそれぞれ受賞。他に『ボクの町』『風紋』『晩鐘』『鎖』『嗶う闇』『しゃぼん玉』『風の墓碑銘（エピタフ）』『ニサッタ、ニサッタ』、エッセイ集『いのちの王国』など著書多数。巧みな人物造形、心理描写が高く評価されている。